

多国間学生協力プロジェクト

MIS

2013 年度年次報告書

多国間学生協力プロジェクト MIS

2013 年度年次報告書

目次

1. 代表挨拶	3
2. 団体概要	5
3. 団体の沿革	5
4. 活動報告	6
4.1 事業報告	6
4.1.1 ネットワーク部門長挨拶	6
4.1.2 ネットワーク部門活動紹介	7
4.1.3 渡航報告	9
①カンボジア渡航(2013)	9
②カンボジア渡航(2014)	14
③シンガポール渡航(2013)	20
④ベトナム渡航(2013)	26
⑤ミャンマー渡航(2014)	36
4.1.4 提携先の声	38
4.2 運営報告	40
4.2.1 ファシリテーション部門長挨拶	40
4.2.2 ファシリテーション部門説明	41

4.2.3 普段の活動について.....	41
5.会計報告	43
6.協賛企業・財団紹介	47
7.役員名簿(2013 年度)	47
8.ご協力をお願い	48
9.連絡先	48

1. 代表挨拶

MIS 設立の根本の動機は 2011 年夏ミャンマーで経験した衝撃にあります。政府関係者の高級住宅が立ち並ぶ通りのすぐ隣にはスラム街があり、スラムの人々はその貧困ゆえに家畜と寝床をともにせざるをえない状況でした。これまで日本の恵まれた環境でぬくぬくと育った自分にとってその惨状はあまりに衝撃的であり、今でも目に焼き付いています。

世界では日本のような環境は希有であり、ミャンマーで目の当たりにしたような状況がまれでないことを身をもって体感しました。この経験を経て国際支援に興味を持つようになり、学生の自分にもできる、自分ならではの支援のあり方とは何なのか模索しました。2011 年 12 月に国際支援の多様な形態を学ぶため世界各国から支援の集まっているカンボジアを訪れた際、タヤマ実践カレッジに足を運びました。帰国後、タヤマ学生との交流が自分の中で非常に印象強く残り、彼らとともに新しい未来を切り開いていきたい、学生同士が協力し合い、自分たちで考えた独自の支援を行うことによって社会に貢献していきたいと考えるようになりました。そしてこうした学生同士のネットワークを世界に拡大し、様々な国で学生による社会貢献活動を広めることで、学生同士の交流によるネットワークを駆使した国際支援を実現させることを目標に 2012 年 1 月に MIS を設立しました。

現代におけるインターネットの普及、ソーシャルメディアの発達はグローバル化を促進し、私たち個人と世界との距離は縮まっていく一方です。個人と世界との結びつきが強くなった今だからこそ、社会貢献意識の視野を世界に広げ、学生でも世界に対して積極的に働きかけることが大切だと考えています。

国を超えて学生同士がつながり、それぞれの独自の価値観を持ち寄ることで生まれるダイナミックな議論を通じて、「学生という立場から、学生だからこそできる社会貢献プロジェクト」を計画、実行することが私たち MIS の使命だと考えています。この使命に則り、2012 年夏にはカンボジアの学生との共同教育プロジェクトを成功させました。

学生という立場でも国を超えた協力を通じて世界に対してインパクトを与えることができるのだという強い信念をもって、今後私たちはさらに様々な国へネットワークを拡大し、世界的な視野を持って社会貢献活動に尽力を尽くしていきます。

2012 年 10 月
共同代表 長谷川太希

私たち MIS は、国を超え、文化・育ってきた環境・生活あらゆる面で異なる学生同士の交流・議論によって、多角的な視点から課題を発見し、解決策を生み出し、実施することを目指しています。学生主体の組織であるため、学生との協力・共創という点に焦点を絞り、世界中の学生と切磋琢磨していきたいと考えております。

議論と実行を伴う PDCA サイクルを迅速に回すことにより、活動の対象となる現地の子供たち等、協力する現地学生、MIS メンバー、我々をサポートしてくださる方々すべてが、満足と感動を得られるような活動を続けていきたい。そんな思いで日々活動しております。

新しいこと、もの、人への弛まぬ興味。自分と異なる他者の受容。常にこれを意識しつつ、微力ながら社会へ貢献し続けることができれば本望です。

2012 年 10 月
共同代表 谷雄太



2.団体概要

2.1 理念

Seed the future, Lead the world

~Pave the way for a brilliant future~

MIS の理念はこれからの将来を担っていく我々学生が、明るい未来を切り開き、国の垣根を越えて世界を引っ張っていく存在となっていこうとする精神を謳っている。

2.2 目的

社会に対して主体的・積極的に貢献することのできる次世代リーダーの輩出

MIS の目的として、自国の社会と自ら向き合うことでその社会に孕む問題を見出だし、社会をよりよくする為にその問題解決を行う姿勢と能力を持った人材へと成長することを掲げている。

3.団体の沿革

年	月	主要な出来事
2011	12	創設者により、団体発足
2012	4	1 期メンバー加入
	8	カンボジアにて第一回教育プロジェクト実行
2013	4	2 期メンバー加入
	7	特定非営利活動法人化
	8	ベトナム視察渡航
	9	カンボジアにて第二回教育プロジェクト実行・シンガポール視察渡航
2014	3	ミャンマー・カンボジア視察渡航

4.活動報告

4.1 事業報告

4.1.1 ネットワーク部門長挨拶

こんにちは。2013 年と 2014 年の 5 月までネットワーク部門長を務めました、東京大学総合文化研究科総合社会科学専攻国際関係論コースに所属しております宮川慎司です。私はこの団体ができた初代のネットワーク部門長ということで、就任当時はカンボジアとしかなかったつながりを、ASEAN 加盟諸国に広げることを推進いたしました。そして、2014 年 5 月現在、カンボジアのほかに、ベトナム、シンガポール、ミャンマーの現地の学生団体とコンタクトを取り、訪問することに成功いたしました。ネットワークを拡張するうえで一番難しい部分は、現地でのカウンターパートとなる団体を探すことです。私たちの活動に理解を示し、一緒に活動してくれる団体を見つけることは案外難しいことです。また、そのような団体とコンタクトがとれたとしても、お互いに顔を知らない状態で、SNS やメールを駆使してプロジェクト実行までもっていくのも大変な作業です。しかし、そのような苦難を超えて実際に現地を訪問してカウンターパートたちと会い、プロジェクトを一緒に行えた時の喜びはひとしおです。もちろんプロジェクトを行い、何らかの成果を上げることは重要なことです。しかし、そのプロジェクトを通じて得る最大のものは、コミュニケーション能力、プロジェクトマネジメント能力などのスキルではなく、プロジェクトをともに行った仲間そのものでしょう。これは私見ですが、プロジェクトに参加した多くのメンバーが同じことを感じているのではないのでしょうか。人種、政治思想、様々な利害関係を越えたところにある純粋な友情、それを実感するために活動を続けていく所存です。

2013 年 3 月
ネットワーク部門長 宮川慎司

4.1.2 ネットワーク部門活動紹介

4.1.2.1 ネットワーク部門概要

ネットワーク部門は、その名の通り、国内外の学生団体と協力関係を築き、プロジェクトの計画、運営を担当する。具体的な手順としては、まずネットワークを築く相手国を定める。次に、プロジェクトを行うチームを組織して、プロジェクトを共に行うカウンターパートを探す。そして、実際にプロジェクトをカウンターパートの団体と協議しながら計画し、実際にその国に訪れて計画を実行する。これまでのところ、カンボジア、シンガポール、フィリピン、ミャンマー、ベトナムの5国のプロジェクトがある。今後、このネットワークは ASEAN 加盟国すべてに広げていく。このように、ネットワーク部門の中にはいくつもの国別プロジェクトが存在する構造になっている。そのプロジェクト間の情報を共有し、計画を円滑に進めるために、月に二回ほど各プロジェクト長と部門長が集まってミーティングを行っている。

4.1.2.2 各チーム紹介

【JCSI チーム】 人数:6 名 結成時期:2012 年 4 月

JCSI とは、Japan and Cambodia Students Interaction の略称であり、このチームはカンボジアの学生を対象とした国際交流・国際協力プロジェクトの議論と実行を担っている。具体的な活動としてはタヤマ実践カレッジという在カンボジアの日本語学校の学生と協力し、2012 年・2013 年の 9 月にカンボジアのコンボンチュナ州の農村にある小学校において教育プロジェクトを実行した実績がある。我々が渡航する以外に 2012 年の冬にカンボジア人学生を日本に呼び、企業訪問やワークショップを行う ExJapan プロジェクトも実行しており、日本・カンボジア間の相互交流を進めている。2014 年夏にも教育プロジェクトを実施する予定である。

【JSSI チーム】 人数:3 名 結成時期:2013 年 5 月

JSSI とは、Japan and Singapore Students Interaction の略称であり、このチームはシンガポールの学生を対象とした国際交流・国際協力プロジェクトの議論と実行を担っている。2013 年 9 月に MIS メンバー16 名で視察渡航を行い、シンガポール国立大学の Japan Study Society の学生と協力し、フィールドワークや NGO 訪問、社会問題についてのディスカッションを行った。2014 年夏は前年度の視察渡航で得たシンガポールの教育に関する問題意識をカンボジアにも向け、シンガポール人を一般公募で募集しシンガポール・日本・カンボジアの3カ国の学生による教育プロジェクトをカンボジアにて実施する予定である。

【JVSI チーム】 人数:6 名 結成時期:2013 年 5 月

JVSI とは、Japan and Vietnam Students Interaction の略称であり、このチームはベトナムの学生を対象とした国際交流・国際協力プロジェクトの議論と実行を担っている。2013 年 8 月に MIS メンバー 3 名が視察渡航を行った。JVSI は環境についてのプロジェクト実行を目指しているため、環境・農業系の大学であるフエ農林大学の教授と学生と提携し、ラグーンの水質汚染を見に行くといったフィールドワークやベトナム人学生とのディスカッションなどを視察渡航で行った。2014 年 6 月に再度視察渡航を行い、9 月に環境プロジェクトを実行する予定である。

【JBSI チーム】 人数:5 名 結成時期:2014 年 1 月

JBSI とは、Japan and Burma Students Interaction の略称であり、このチームはミャンマーの学生を対象とした国際交流・国際協力プロジェクトの議論と実行を担っている。2014 年 3 月に MIS メンバー 5 名が視察渡航を行った。この渡航では教育系の団体である ABFSU のメンバーと社会問題についてのディスカッションや、ヤンゴン大学や塾、スラム街などを訪問し、今後のプロジェクト立案のための視察を行った。詳細な内容は決まっていないが、2014 年夏にプロジェクトを実行する予定である。

【JPSI チーム】 人数:4 名 結成時期:2014 年 3 月

JPSI とは、Japan and Philippine Students Interaction の略称であり、このチームはフィリピンの学生を対象とした国際交流・国際協力プロジェクトの議論と実行を担っている。結成間もないチームであるため、現在はフィリピンについての勉強会や社会問題の洗い出し、提携先探しなどを行っている。現地の実情を調査する目的で 2014 年夏に視察渡航を行う予定である。

4.1.3 渡航報告

①カンボジア渡航(2013)

JCSI 渡航報告 2013 年 9 月

【渡航目的】

教育プロジェクトの準備・実行

カンボジア学生との社会問題議論・交流

【渡航概要】

- ・日時 9月10日から9月16日
- ・場所 カンボジアのプノンペン、9月14日15日は教育プロジェクトのためカンボジアのコンポンチュナン
- ・参加者 MIS メンバー17人
- ・提携相手 タヤマビジネススクールの学生約100人、タヤマビジネススクールの先生約10人、コンポンチュナンの小学生約420人(プロジェクトの対象)



授業内容議論(7月)

【スケジュール】

[渡航前]

6 月
<p>プロジェクト立ち上げ</p> <p>プロジェクト憲章作成（目的、ステークホルダー分析、成果物の考察）</p> <p>カンボジア知識共有（経済、教育、歴史、宗教、政治、農村、生活環境）</p> <p>教育プロジェクト内容案出し（実現可能性抜きに）</p>
7 月
<p>授業内容議論（テーマ決定、具体的内容の案出しと絞り込み）</p> <p>日程の大枠決定</p> <p>MIS メンバーの航空券予約</p>
8 月
<p>授業について、科目決定、詳細決定、実際の動きの決定、模擬授業実施</p> <p>渡航中の教育プロジェクト以外の内容決定（孤児院訪問、プノンペン大学学生との議論、観光など）</p> <p>詳細な行程決定</p>
9 月
<p>行程と内容の組織全体への共有</p> <p>持ち物とその割り振り等の最終確認</p>

[渡航中]

日付	活動内容
8/10	プノンペン着
8/11	孤児院訪問 プノンペン大学の学生と議論
8/12	タヤマ生との交流 (市内の観光、タヤマ学生への日本語授業)
8/13	休息 教育プロジェクトの準備
8/14	コンポンチュナンへ移動 教育プロジェクト前半実施
8/15	教育プロジェクト後半実施 プノンペンへ移動
8/16	日本へ帰国

【活動報告】

・教育プロジェクト

★テーマ

「子供たちの将来の可能性を広げる」

・大きく分けて 2 系統のスタンス

①自由に選択肢を選べるように思考力をつける(算数、理科の実験)

②外の世界に目を向けさせる(職業紹介)

・共通した意見として、「考える」ことの大事さ。私たちの帰国後にもつながるように

→考える授業、考えることで楽しくなる授業

→ここで身近なものを利用する

・環境整備(村人、先生、設備、教科書、文房具…)も実現できれば後につながる

★活動

・6月から渡航まで、プロジェクトの目的から話し合いを重ね、タヤマの学生とはスカイプを通じて報告・アイデアの交換、実現可能性の審議や現地の様子の共有といった話し合いを行って、プロジェクトの内容である授業をつくっていった。渡航前に授業の内容は決めておき、プロジェクト前日に道具の用意や授業内容の確認を行った。

・1 日目には推理と理科実験の授業を行った。継続性の観点から身近なことへの関心を芽生えさせることや試行錯誤を促すことを意識した。2 日目には将来の選択肢を知ってもらうというスタンスのために、今回はまず子供の現状や意思の確認を行うことにして、プロジェクト実施メンバーと農村の小学生でお互いに自分の夢を紙にかきあって展示するという企画を行った。これに関連して、親が子供にどうなっ
てほしいと思っているのかについての聞き取り調査

も1日目の授業後に行った。また、衛生観念が行き届いてないこと、体育の授業がないことから衛生教育(衛生、手洗い、ごみ拾い)と体育(長縄)の授業も行った。

タヤマの学生が多く参加したおかげで、420人を超える多くの小学生もきちんと統率することができた。一方で全体の人数が増えたことで内容の徹底などが難しい場面もあったが、おおむねタヤマの学生とよく協力して授業を作り上げることができた。

・プロジェクト後の帰り道では、JCSIプロジェクトによる学生たち側の変化を確認・調査するためにタヤマ生に向けてのコーチング・アンケートを行った。



・その他

★プノンペン大学の学生との交流

プノンペン大学の学生と、新しいプロジェクトの可能性を探すために、カンボジアでの社会問題のうち、学生である自分たちで協力して取り組めるものについて話しあった。アルバイト職がないこと、ごみ問

題、政治などについて現地の学生から直接事情を聴けた。グループによっては具体的な問題の解決案まで踏み込んで考えることができた。この成果は今後新しいプロジェクトを考えていくヒントとして生きると考える。

★孤児院訪問

タヤマの学生が何度かたずねているという孤児院を訪問した。私たちは絵本の寄贈を行い、本をみんなで回し読みするときにつかうように、子供たちの自分専用のしおりづくりを一緒に行った。しおりづくりの後は、広場に出てサッカー、ブランコ、長縄、折り紙など思い思いに遊んだ。

★タヤマ学生との交流

カンボジアでの移動や食事、滞在については、タヤマの学生と教師の方に案内、同行をしていただいた。普段から行動を共にしてくれた学生たちとはかなり多くの話を交わすことができ、互いの興味関心を交換することができた。私たちはタヤマの学生に対して2回日本語の授業を行った。内容は言葉を使ったゲームや日本語でのディスカッションであった。



【渡航成果】

・プロジェクトの実行を達成

▶計画していた教育プロジェクトについて、必要な道具を準備し、実行することができた。教育プロジェクト後に提携相手のタヤマの学生に対して取ったアンケートにおいて、「このプロジェクトに参加してあなたは変わりましたか」という質問に



対し、回答者34名中34名が「はい」を回答した。変化の内容としては、子ども

の問題、社会貢献、自分の将来、貧困、田舎地域への関心・意識や知識の向上というものや、協力することや我慢の経験を得られたというものがあった。

・農村の児童に対する教育を実行

▶カンボジア農村部の小学生に対して、思考力をつけるための授業を行った。

・子供たちが持つ夢を調査し、彼らが自分の将来について持つイメージを知ることができた。また、農村部の子供を持つ親に対する聞き込みも行うことができた。親子ともに子供の将来について農業とは違う職を志向しており、都市への進出志向もあるが、具体的なイメージは乏しいということ、経済や地理的な理由からそれらの実現可能性が低いということといった実情を知ることができた。

・カンボジアの学生との交流、渡航の経験

・タヤマスクールの学生、プノンペン大学の学生らと、議論や行動を共にすることによって彼らの問題意識や考え方を知ることができた。外国での活動経験をわれわれが学生として得ることができた

②カンボジア渡航(2014)

JCSI 春渡航

【渡航目的】

①タヤマ実践カレッジ教育チーム学生との議論

②カンボジアについての情報収集

①タヤマ教育チーム及び MIS は、2014 年夏季に Multilateral Project を行うこととなっている。本プロジェクトは、教育プロジェクト(2012 年から 2 度にわたってタヤマ教育チームと MIS によって行われきたプロジェクト)にシンガポール人学生を招くというものだ。その実施に当たってシンガポールの学生団体等への案内状送付のため、3 月中に教育チームとプロジェクト内容についての議論を行い、内容を一部決定することとした。

②プノンペン市内を直接目にすると同時に、実際にカンボジアで暮らすタヤマ実践カレッジの学生やカンボジアで活動する NGO からお話を聞くことでカンボジアの実情を知ろうとした。

【渡航概要】

(1)参加者

・MIS メンバー3 人

(2)提携先

・タヤマ実践カレッジ教育チームメンバー7 人

* 教育チーム…タヤマ実践カレッジの学生および OB で、カンボジアの教育に問題意識を持つ有志の集まり

(3)渡航日程

[渡航前]

1 月 22 日
3 月に渡航を実施することを決定

1 月 22 日～3 月 1 日
参加者の募集 タヤマ実践カレッジ教育チームとの議論内容の 確定 タヤマ実践カレッジとの日程調整
3 月 1 日～3 月 10 日

渡航日程の決定

カンボジアの NGO 団体に面会の申し込み

旅程の詳細決定

[渡航中]

日付	活動内容
3/11	日本出国
3/12	教育チーム代表との会議 プノンペン大学の学生と議論
3/13	タヤマ実践カレッジでの授業および教育 チームへの勧誘
3/14	プノンペン市内視察 JICA 訪問
3/15	JCIA 職業訓練センター訪問 タヤマ実践カレッジ教育チーム学生との 議論 渡航反省会
3/16	日本帰国
3/31	渡航報告会

【活動報告】

(1)タヤマ教育チームとの議論

3 月 15 日 15:00～20:00 にタヤマ実践カレッジにて行った。

今回の議論においては、良い結論を出すことのみではなく、良い結論が出るようなよく設計された議論を行うことも重視した。

具体的には教育チームリーダーと話し合い、①前回プロジェクトの反省、②目的の確認、③対象小学校の問題分析、④解決策の提案、という流れで議論を行った。

①主な反省点として、内容面に関しては「内容を詰め込みすぎたため、1 つ 1 つのイベントが効果の薄いものとなってしまった」「小学生向けとしては授業の内容が難しすぎた」というような意見が出た。今回のプロジェクトでは子供たちにとって適切なレベルの授業等をじっくり行うことを意識することとした。

また、MIS とタヤマのコミュニケーションのあり方についても問題が指摘され、より両国の学生が密接に交流するよう工夫することとした。

②プロジェクトの目的としては、各人が教育プロジェクトに参加した動機等を引き出し、最終的には「良い教育によって子供たちにより良い人生を送ってもらう」という目的を確認するに至った。

③小学校の問題点については、各参加者が感じた問題点を 1 枚のカードにつき 1 つずつ書いていき、KJ 法を用いて分析した。

挙げられた問題点は大きく分けて「物不足」「非衛生的な環境」「子供たちの意識」「制度の不備」という 4 つのグループに分けることができた。「物不足」では教材や文房具といった勉強道具に加え、服や靴の不足といった問題点も指摘された。「非衛生的な環境」というのは、きれいな水がないことや、校庭にごみが散乱していることを指す。「子供たちの意識」においては、勉強へのモチベーションが低い、授業が面白くない、将来の夢がない、等の問題点が挙げられている。「制度の不備」としては教師の賃金が安いことモチベーションが低いこと、通学時間が長い(学校数が少ない、交通機関がないことによる)ことなどがある。

④続いてこれらの問題点に対して考えられる解決策を挙げていった。ただし、「制度の不備」に対しては自分たちでアプローチすることが難しいということで、今回は検討しないこととした。

「非衛生的な環境」に対しては、ゴミ拾い等の取り組みを習慣化する、衛生の重要性を教える(子供に対しても親に対しても)、ゲーム形式で衛生感覚を身につけるなどの案が出た。

「物不足」については中古品あるいは新品を寄付するという案に加え、自分たちで作る、あるいは村人と一緒に作るという案も出てきた。

最後の「子供たちの意識」については比較的抽象的な意見が多かった。そこでこれを一回集約し、そこから子供たちの意識を変える上で大事なポイントを抽出した。その結果「楽しい授業を行う」「勉強するとどのような良いことがあるかを教える」「自分の夢を持ってもらおう」という3つの柱が明らかになった。その上で改めて案を出していったところ、ゲーム形式の授業やそのネタをまとめた本を先生に渡すという案、勉強して夢がかなうまでの様子を劇や紙芝居で見せるという案、様々な職業を紹介して将来の夢を考えてもらおう案などが出てきた。

今回の議論では最後に「子供たちの意識」に働きかけるために何を行うか決定することとし、最終的に2つの案が残った。

1つ目は、高学年に対して職業とその職業に就くまでを紹介する紙芝居を作るというものだ。昨年子供たちに対して将来なりたい職業についてアンケートを実施した結果、280人中112人(40%)が医者、95人(34%)が教師と回答しており、このような偏りの背景には村に存在する職業なら知っているが、その他の職業の種類自体をあまり知らないということがあったと推測された。一方で子供たちの保護者2名に代表して子供の将来について話を聞いたところ、子供が村を出て都市で仕事に就くことを望んでいた。これらのことから、子供たちへの職業の紹介及びいかにその職業に就くかを伝えたいということになった。伝え方としては、実現しやすくプロジェクト後に残していくこともできるということから、動画や劇ではなく紙芝居が選ばれた。

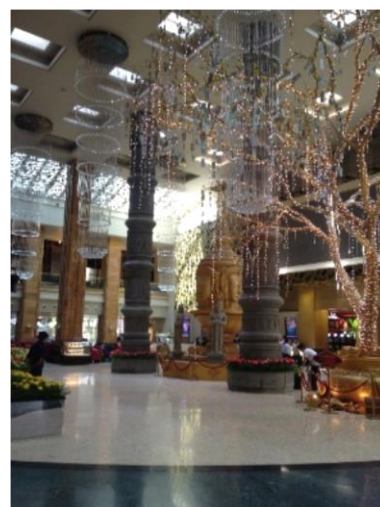
一方、低学年の生徒に夢をもってもらうのは難しいと思われたため、別の企画を用意することとした。先ほど出た「楽しい授業を行う」という方向性及び昨年の反省から、頭を使う簡単なゲームを通じて達成感を感じてもらおうという案に決定した。



(2)カンボジアについての情報収集

プノンペン市内視察ではナーガ・ワールド、ソリア・ショッピングセンター、イオンモールの建設現場など、カンボジアの発展を象徴する場所を見てきた。JICA においてはカンボジア全体が抱える問題点や、それらに対する取り組みを聞いてきた。続いて訪れた JCIA は、身体障害者や極貧者を対象に縫製、バイク・テレビ修理等の職業訓練を行っている NGO で、カンボジア内の職業訓練センターの所長の方から活動を始めた経緯や実績について話を伺った。

タヤマ実践カレッジでは、学生たちにカンボジアで今起こっている問題について問いかけた。プノンペンに実際に住む彼らを感じる問題点として、交通問題やゴミの放置・不法投棄、汚職などが挙げられた。今後はこれらの問題点についてタヤマの生徒と取り組んでいくことも視野に入れている



【渡航成果】

- 2014 年夏に行うプロジェクトの内容を一部決定することができた
- 議論自体も従来は論点が曖昧で散漫としたものになりがちだったが、今回は流れが設計され論点もぶれない効率的な議論ができた。
- 現地の実際の様子や、現地で活動・生活する人々の話を聞くことで、カンボジア、特にプノンペンの状況を実感も伴って知ることができた。

③シンガポール渡航(2013)

2013 年夏シンガポール視察渡航報告

日時:2013 年 9 月 5 日～9 月 10 日

人数:16 名 (MIS メンバー)

スケジュール

日程	午前	午後	夜
9/5	成田集合	上海到着	チャンギ国際空港着。ホストの家へ
9/6	NUS 訪問 教育問題についての議論	NUS 訪問	観光
9/7	教育系 NGO OL 訪問	OL 事務所訪問	観光
9/8	チャイナタウン視察	リトルインディア・ゲイラン地区視察	マリーナベイサンズ視察
9/9	観光	観光	Farewell Party
9/10	チャンギ国際空港集合・ 出発		

渡航目的

JSSI チームは 2013 年 5 月に結成されたチームである。今回の渡航は結成から 4 ヶ月という時期で迎える長期休暇中であつたため、プロジェクト実行の際のシンガポール現地での提携先の確定と、プロジェクトとなりうる社会問題を見つけるための現地視察を目的とし、渡航を行った。

活動報告(9/5・9/10 は移動のみのため割愛)

準備段階

メンバーの一人がシンガポール国立大学の学生と親交があり、JSS (Japan Study Society)を紹介してもらう。メールで基本的に連絡をとっていたが、JSS のメンバーのひとりが日本に来たため、6 月に新宿で会い、今回の渡航についてのプログラムを摺合させた。その後もメールを介して連絡を取り合った。

渡航時

9/6

8:30 Clementi 駅集合、モールで朝食を摂る。

9:30 JSS のメンバーと共に NUS(シンガポール国立大学) へ向かい、構内を案内してもらう。構内にはバスが走っておりとても歩いて回ることができないほど広かった。Liberal Arts Faculty と総合図書館、食堂を見学した。右写真はシンガポール国立大学構内。



11:00 ラウンジで JSS メンバーとディスカッションを行う。テーマは「日本とシンガポールの教育の現状と、教育格差の原因」。早期(小学校高学年から)の能力別のコース分けがシンガポールの教育格差の原因だ、などの意見が出た。右写真はシンガポール人学生との議論の様子。



15:00 モールで 1.5 時間自由時間。

19:30 ナイトサファリに到着。JSS メンバーと動物ショーなどを見た。

駅へ戻り、それぞれホストと帰宅。

9/7

10:30 Web 上で無料の授業ムービーを提供している NGO、OL(日本で言う manavee のようなもの)の設立者から話を聞く。

OL の設立者からシンガポールの教育システムや活動についての説明を聞く。

システムは以下のようなものであった。

- ・授業は誰でも登録すれば無料で受けることができる。
- ・内容は大学受験対策などが中心で、1講義が 3 分×10 程度の長さである。
- ・講師は基本的にボランティアで、OL が借りているスタジオですべての動画を撮影する。



速めのシングリッシュで聞き取りがやや難しかったため、MIS メンバー同士で聞いた内容を共有。

その後、2 班に分かれて OL との関わり方を話し合う。

14:00 OL の事務所にお邪魔する。

カメラに向かった授業風景を見せてもらう(機会費用やベクトルを題材に)。右写真はスタジオの様子。

16:00 電車でセントーサ島へ移動。水族館組と海組に分かれて観光。

20:30 Harbour Front 駅のフードコートで夕食。

駅でホストと合流し、各自帰宅。

9/8

11:00 City Hall 駅集合。

駅周辺のスターバックスで MIS メンバーだけで会議を行った。テーマは「JSS・OL と MIS の今後の関わり方」。

12:30 Chinatown 駅到着。高層ビルが立ち並ぶ都心とは雰囲気が異なり、中国風のカラフルな装飾がされた建物が並んでいた。

13:00 地元の人向けの市場で昼ご飯と買い物。観光客向けの飲食店と異なり、衛生にそこまで気が遣われておらず、英語が通じないこともしばしばあった。洋服やコンセント、爪切りなど生活用品が多く売っていた。雑然としていたがにぎやかな雰囲気であった。カエルを食べたメンバーもいた。右写真は市場の様子



14:00 Little India 駅到着。駅を出た瞬間から、明らかに人の層が違った。肌の色が濃いインド系の人ばかりだった。町はカラフルでにぎやかだった。立派なヒンドゥー教寺院があったが、建設中で入れなかった。写真は Little India を視察中の MIS メンバー

16:00 Geylang(風俗街)到着。風俗向けの店や品物が多くあったが、普通の飲食店もあった。昼なので人はまばらだったが、飲食店は 5,60 歳くらいの男性達で妙ににぎわっていた。彼らは昼なのに暇そうだった。



17:00 City Hall のショッピングモールで一時
間弱の休憩。

19:00 Marina Bay のフードコートで夕食。

20:00 Marina Bay Sands へ。芸術的な構造の建物と、ライトアップがとても華やか。

21:30 City Hall で解散。



9/9 ユニバーサルスタジオシンガポールで一日観光した。JSS メンバーや MIS メンバー同士でたくさん話ができ、仲が深まった。

19:30 Farewell Party へ。JSS メンバーたちとともに沖縄料理を楽しんだ。



渡航後

MIS メンバーのうちシンガポール渡航に参加したメンバーと JSS のホームステイ先の学生を構成員とする Facebook グループを作成し、互いの団体のイベントの報告、告知など情報交換を行っている。また、JSS メンバーが日本に渡航した際には、食事会の開催や、観光案内など、日本国内で適宜文化交流を行った。

渡航成果

渡航中にホームステイを行っただけでなく、観光や視察中も常に JSS メンバーと共にいったため、シンガポール人学生と真面目な議論から気楽な世間話まで腹を割って話すことができた。JSS メンバーとの深い交流を実現したため今後も連絡、協力していけるような安定した関係を構築できた。

日本にいただけではわからないような、街や人々の雰囲気を感じられたり、直接シンガポール人と会話していく中で日本人だけでは見つからないような発見ができたりしたことは、大きな収穫であった。シンガポールが先進国であるとい

うことは常識の範囲内で知っていたが、実際に行ったことで先進国であるものの多民族国家であるがゆえに起きている問題や収入の差によって生まれる教育格差を見ることができた。今後はこの渡航を経てメンバーそれぞれが感じたことを元に学生としてできることを探っていこうと思う。

④ ベトナム渡航 (2013)

● 渡航目的

I、フエ農林大学生との提携関係を構築し、次回プロジェクトを共同で行うことを提起

II、次回プロジェクトの具体的なビジョンを形成

● 渡航情報

○日時:2013 年 8 月 7～10 日(滞在は 8 月 6～12 日)

○場所:ベトナム中部フエ

○参加者:

(渡航メンバー)縫部瑞貴、野村実広、井堀拓郎

(今回は不参加)朝原真知子、布施拓馬、大和なるさ

○提携相手:

Hue University of Agriculture and Forestry (フエ農林大学)

(Dr. Ho Dac Thai Hoang (Professor)、Luu Thi Ngoc Hanh、Nguyen Tji Ai Niem

Phan Van Thien、Le Cao Thao Quyen、Dinh Van Dieu、Hoang Thi Ai My) 計 7 人

○プロジェクトスケジュール

(渡航前)

・5 月下旬:プロジェクト実施候補地としてベトナムが挙がる

・6 月上旬:プロジェクト大枠決定(環境 or 教育)

- ・6月中旬:プロジェクトコアメンバー決定、提携先探し
- ・6月下旬:提携先探し、フエ農林大学からの返信、協力を決定、ベトナム勉強会
- ・7月上旬:渡航メンバー決定、フエ農林大学との連絡継続
- ・7月中旬:MIS 全体で視察承認、日程調整、ベトナム側のメンバー決定
- ・7月下旬:スケジュール決定
- ・8月初め:Skype で現地と最終打ち合わせ、保険や宿泊場所等の最終準備
(渡航中)
- ・8月5日:成田空港出発、タイ国際空港泊
- ・8月6日午前:ノイバイ国際空港着、ハノイ駅まで移動(タクシー)

午後:カフェにてフエ農林大学と Skype、フエまで移動(夜行列車)
- ・8月7日午前:フエ到着、学生たちと合流、宿泊場所へ

午後:フエ農林大学でミーティング、夜は学生とともに市内観光
- ・8月8日午前:フィールドワーク①(Tam Giang Lagoon 視察)

午後:ミーティング、学生たちと市内観光
- ・8月9日午前:フィールドワーク②(マングローブ・養殖場の視察)

午後:ミーティング、学生たちと市内観光
- ・8月10日午前:最終ミーティング(次回プロジェクト計画)

午後:駅へ移動、学生たちとお別れ、ハノイへ(夜行列車)
- ・8月11日:ハノイ着、市内観光
- ・8月12日:市内観光、ノイバイ国際空港から出発、タイ国際空港泊
- ・8月13日:成田空港着

●現地での活動報告

現地では2回のフィールドワークとそれに基づいたミーティングが活動の中心であった。フィールドワークはフエ中心部から車で1〜2時間ほどの Tam Giang Lagoon、及び Huong Phong Commune にあるマングローブ・養殖場へ赴き、学生たちの話を聞きながら、実際の水の汚染具合等を観察した。ミーティングではフィールドワークで観察したこと、学んだことをもとに、今後学生という立場で何ができるかということを考えた。フィールドワークの調査結果に関しては以下に、ミーティングの具体的な内容及び考察に関しては次節で、それぞれ簡潔に示す。

(1) Tam Giang Lagoon (the biggest lagoon in Southeast Asia)

・岸にごみが大量に存在(写真①②)

→自分には影響がないという環境への無関心から、家庭のごみをそのまま投棄

→環境保全という考え方は理解していても、利益にならないから取り合わない

・周辺にフェンスなどはなく家とじかに接している

→ゴミ捨てを助長

・下水道システムは未整備

→生活排水がそのまま川へ流されることも多い

・汚染された部分とそうでない部分に分かれている(魚がいる or いない)

→ごみが捨てられた付近の汚染がひどい

→養殖のために設置した竹のしげみを放置、ごみや海藻がたまり腐る

・ボート上で生活する人々の存在

→エビや小魚を取り現地で消費(市場にはあまり出回らない)

→生活排水やごみはそのまま川へ、衛生が悪く自分たちも汚染される

→学校へ行けない子どもたち＝格差がなくなる

・ダムの辺りは特に汚い、悪臭もひどい(写真③)

→捨てられたゴミが溜まってしまっている

・河川内に多数の網仕掛けのようなものが設置(写真④)

→漁民は見たところ少ない、管理が雑

→使用済みのものをそのまま放置し、ごみや海藻が溜まることで汚染につながる

写真①



写真②



写真③



写真④



(2) Ru Cha (mangrove and fish farming area)

- ・マングローブ付近やため池のような場所で魚やエビの養殖(写真⑤⑥⑦)

→過去に使用した設備をそのまま放置

- ・ため池の水は定期的に入れ替える

→水が抜かれた池の底には汚染物が沈殿、水が非常に汚い

- ・安価な化学殺虫剤の使用

→環境に全く配慮されていないため汚染されてしまう

→関係のない動植物にも影響、生態系の破壊

→短期的な利益の追求が問題

・周辺には主にプラスチック製の商品のごみが散乱(写真⑧)

→田舎ではごみを回収する施設がない地域もある

→あったとしても、回収場所に持っていくのが面倒なため近くに捨てる(都市も同様)

・汚染されている川にはしばしば「JAPAN」と呼ばれるヒヤシンスが繁殖

・カニなどの野生動物、ヤギやアヒルなどの家畜が多数

写真⑤



写真⑥



写真⑦

写真⑧



(3)その他

・汚染の原因:家庭排水、産業排水、未整備である上下水道、ゴミの投棄 etc.

→ごみ収集システム

ー都市部では毎日回収に来るが、農村部では週 2~3 回程度

ー回収場所に捨てず(面倒だから)、家の周囲に捨てることも多い

→必要以上のビニール袋の使用

ー使用済みのものを指定場所(回収場所)ではないところに捨てる

→ごみの分類がない(フエ)

→人々の関心は環境よりもお金

→汚染に対する罰金は厳しいが、それを特定するのが困難

ー法律は厳しい⇒人々は法の網の目をかいくぐって汚染

・一方で、ここ数年は子どもたちに対して環境に対する教育がなされている

●渡航成果

今回のプロジェクトは、前述したとおり「Ⅰ、フエ農林大学生との提携関係を構築し、次回プロジェクトを共同で行うことを提起」「Ⅱ、次回プロジェクトの具体的なビジョンを形成」という2つの目標のもと行った。

Ⅰに関しては、今回交流した6人のフエ大学の生徒、及び交流事業の担当であった Hoang 教授と密度の濃い4日間を過ごし、MIS 側のベトナム渡航の目的を伝えただけで、今後も協力関係を築き、将来自分たちの手で何らかのプロジェクトを行うという合意も得られたことから、達成したと言えるであろう。一方で、今回は教授・生徒の助けが大きかったことも忘れてはならない。観光は考慮しないとしても、2回のフィールドワークとディスカッション、さらに食事の場所やこれらの移動は、自力では到底行えなかったことであり、教授・生徒たちの助けがなかったら今回の渡航は成功しなかったであろう。ベトナムにおける水問題に関しても、自分たちの知識はとても少なく学ぶことが非常に多かった。反省・課題点の部分でも述べたように、次回以降はもっと早い段階からこちらのやりたいことを具体的に伝え、可能かどうか事前に話し合っただけで、問題に対する知識も含め事前の下調べを綿密に行い、相手に頼り切ることがないようある程度はプランを考えていく必要があるだろう。

Ⅱに関しては、フエ滞在最終日のディスカッションによって、学んだことをまとめ、学生としてできることを考え、まだまだ不十分な点はあるものの、とりあえず将来のベトナムにおけるプロジェクトの大枠を完成させることができたため、達成したと言えるだろう。しかし、先ほども述べたように、今回はフエ大学の生徒の助けが非常に大きく、ディスカッションでもどちらかというと学ぶ部分のほうが多かった。加えて、本当にこのプロジェクトが実行できるかは議論の余地があり、今後日本・ベトナムでどのように計画を進めていくにかかっているであろう。また MIS 側から今回の渡航に参加した人数は3人のみであり、今回学んだことをどのように共有していくかも重要である。

その一方で、今回自分たちがベトナムで学んだことはあまり深いとは言えない。まず、自分たちの事前準備の不足からベトナムということに関わらず水問題に関する知識は浅く、その結果ベトナムの学生から水問題の話を聞いても深い洞察は得られなかった。また、フィールドワーク及びディスカッションともに学生のみで、かつ短時間で行ったため、十分と言える考察ができなかったと思われる。今後ベトナムでプロジェクトを行う場合は、自分たちが何を行いたいのかということに基づいた事前準備をしっかりと行うとともに、学生の視点に加え、大学の教授など専門的な視点からの助言なども得られるように計画を立てることが必要となってくるだろう。

総合的に見ると今回のベトナムでのプロジェクトは2つの目標から見て成功したと言える。しかし、今回の渡航で学んだことや次回プロジェクトの内容に関してはまだまだ不十分であり、また、今回の成功はベトナム側の教授・学生の助けによるものが大きいということを忘れてはならない。

※次回以降の JVSI プロジェクト案(最終ミーティングの結果)

テーマ:水の汚染

目的:水汚染に対する人々の意識を高める

場所:農村部(都市部よりも未処理の廃棄物が多い)

誰と:MIS メンバー、フエ農林大学学生、NGO(ex.C4E(Cycle for Environment:ベトナムで環境政策に取り組む企業))、子ども(主に学校の生徒)、農村の人々、企業 etc.

時期:夏季休業中(8月…フエ農林大学の設備が使用可能、9月は休み)

期間:10日前後

内容:学校や家庭を訪問し、水汚染に対する人々の意識を高める

方法:小学校の先生と打ち合わせをし、特別授業のようなものを行う

環境に関する資料を作成し学校で配布、親に見てもらうように言う

農村部の人々を集め(お金を払う必要がある)、大学教授などによる講演を開く

農村部コミュニティのリーダーに話を通し、その地域の人々に伝えてもらう

資金:不明

設備:フエ大学の設備の使用申請

準備:次回のプロジェクトのメンバー集め(今回の人数よりも多く必要)

より深い知識の獲得と共有(日本・ベトナムそれぞれについて)

プロジェクトを行う場所の選定



参加メンバー集合写真



現地学生との交流

⑤ミャンマー渡航(2014)

渡航目的

プロジェクト内容、提携相手を決めるための視察を行った。有力な提携団体 ABFSU(ミャンマー全国の大学の学生自治団体の統合組織)のメンバーらと現地の大学や塾をまわり、教育についての相互でのプレゼンや生徒たちとの議論を行った。また、JICA や JETRO など現地で活動している団体を訪問し、現地での問題や支援の仕方などに関して聞き取りを行った。

渡航情報

日時:2014年3月17日～24日

場所:ヤンゴン

参加者:MIS メンバー6名

提携相手:教育系団体 ABFSU

スケジュール:(2月3回、3月3回ミーティング:事前準備)

3月17日 羽田発 18日 ヤンゴン着 19日 JICA 訪問

20日 AAR JAPAN 訪問、ABFSU 幹部と対面、ヤンゴン大学訪問

21日 JETRO 訪問、プレゼン、郊外大学訪問 22日 塾訪問

23日 ヤンゴン 24日 羽田着

現地での活動報告

ABFSU のメンバーや Wings(ABFSU の Moccy の私塾)の生徒と日本・ビルマの政治・教育・歴史をテーマにプレゼンテーションやディスカッションを行った。また、JICA(国際協力機構)、JETRO(日本貿易振興機構)、AAR Japan(障碍

者の職業支援をする日本の NGO)の現地で活動している方から現状についてお話を伺った他、ヤンゴン大学、東ヤンゴン大学へ訪問した。



渡航成果

ABFSU と極めて良好な関係を築けた上に、Wings という提携相手を発見し、政治・教育をテーマとするプロジェクトの種を蒔いた。政府・民衆双方から政府を見た他、日本国の関わり方を知り、また学生風土や文化そして経済状況を肌身で感じたことで、ミャンマー(ビルマ)に関する幅広く深い理解も得た。相手方の学生の熱心な勉強ぶり、政治的問題意識の高さに大変刺激を受け、将来日本をリードしていく者としての自覚を新たにした。

4.1.4 提携先の声

Lav Srunchhay 氏 (タヤマ実践カレッジ教師)

いつも、心より感謝しています。

MIS とカンボジアのタヤマビジネススクールのプロジェクトは 4 年目になりました。カンボジアのこれからの発展していくとともに、欠かせないものは人材、教育だということが分かっていて、2011 年の 5 月に、初めてカンボジアに訪れた谷さんとたいきさんがタヤマビジネススクールで生徒たちと「僕たちはカンボジアという国、また、社会に何かできる」という話題で討論しました。その結果、「教育」はとても大事なことだと思って、カンボジアでの「Khmer Challenge (教育チーム)」と日本の「JCSI (Japan and Cambodia Students Interaction)」が生まれ、今まで、孤児院や郊外の小学校やゴミ山の子供たちに支援したりしています。そういう社会貢献、あるいは、ボランティア活動に参加することによって、カンボジアの若者も自分の国を発展させるための教育の大切さが分かっているし、シェア(分かち合う)の意識も高めるのではないかと思います。日本人の若者にとってもすごくいい体験、また、一つの学び、一つの気づきになると思います。日本が今豊富な国なので、捨てられる使えるものがたくさんあると思います。それをカンボジアの小学生や孤児院の子供たちに支援をしたほうが良いと思います。

毎年一回大きなプロジェクトを行っています。どこにやるかという、タヤマ学校の生徒の田舎の一つの小学校です。コンボンチューナンという県のプラサック村のプラサック小学校に行って、プロジェクトを行います。プラサック小学校には、カバンがなくて、靴もなくて、文房具がたりなくて、学校に通っている小学生がほとんどです。もちろん、生活が大変で、学校を辞めて、両親の仕事のお手伝いをする小学生もいます。学校が嫌い、学校がつまらない場所などのさまざまな理由で、学校に通いたくない小学生もいます。やはり、そのままの状態だと良くないと思って、MIS とタヤマ学校の生徒たちが自分たちで文房具や日用品やお金などを集めて、プラサック小学校に支援すると決めました。プロジェクトを行うときに、文房具の配布以外は、衛生教育、夢の大切さ、子供と実験したり、遊んだりします。もちろん、プロジェクトの目的もあります。「学校はつまらない場所を魅力がある場所、すごく楽しい場所だと子供に思ってもらいたい」という目的で思いながら、行きます。

プロジェクトを行うたびに、すごく大変で、疲れています。でも、自分が毎回毎回のプロジェクトを行った後の学びや気づきが一杯と感じています。それだけじゃなくて、自分より大変な人、貧しい人、勉強したくて勉強できない子供(人た

ち)を助けられます。それはすごく小さいことですが、子供たちが学校に通いたい、学校がすごく面白い場所だと感じてくれれば、すごく嬉しいです。たくさんの人材がいればいるほど、国の発展や将来にかかわると思います。まだ助けてほしい子供たちや場所がたくさんあると思いますが、皆さんの力を合わせたら、カンボジアという国も日本のような国になるに違いありません。

ぜひ、今年も来年のプロジェクトに参加し、たくさん協力してください。

よろしくお願いします。(原文ママ)

4.2 運営報告

4.2.1 ファシリテーション部門長挨拶

こんにちは、ファシリテーション部門長を務めています東京大学文科三類2年の内藤美織です。今回は渉外を担当する部門の部門長としてご挨拶をさせていただきます。

ファシリテーション部門では、MIS 外部の方へ団体やプロジェクトについて説明し、ご理解・ご協力を頂くことに努めています。自分達が1から作り上げたプロジェクトや MIS という団体を、外部の方にご理解頂けた時は、大変嬉しいです。またそのご理解・ご協力が MIS の活動をさらに有意義なものとしていく点で、非常にやりがいのある活動だと感じています。また社会人の方とお話する中で、学生にはなかった視点から、厳しいお言葉を頂くこともあります。そのようなご指摘こそ、MIS を客観的に見直し私たちを成長させてくれる、大変貴重な機会です。お忙しい中、私たちの話に耳を傾けて下さる皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。いつも誠にありがとうございます。

MIS はまだまだ未熟な点が多く、日々試行錯誤の途上にあります。しかし、国際的視野を持つリーダーが率い、互いに協調しあえるようなアジアや世界。そんな未来を思い描いて、メンバーは誇りをもって活動しております。ネットワーク部門では、東南アジアの学生との議論を重ね、工夫をこらしたプロジェクトを作成しています。そんな私たちの熱意やプロジェクトの魅力を皆様に伝えられるよう、ファシリテーション部門も精進致します。

これからも、ご理解・ご協力、また貴重なアドバイスのほど、何卒よろしくお願い致します。

2014 年 3 月

ファシリテーション部門長 内藤美織

4.2.2 ファシリテーション部門概要

ファシリテーション部門は、組織運営を担う部門である。ネットワーク部門(事業部)の活動が円滑に進むよう、資源の管理や広報などを担当している。活動は大きく外務と内務に分かれている。

外務の主な活動は、渉外活動である。MIS 外部の方へ MIS の理念や活動内容をご説明し、ご理解・ご協力をお願いしている。内務では、勉強会の開催を主な活動としている。沢山の学生団体がある中で独自のインパクトを持続けるため、MIS では内部の専門性として英語力・コーチング・プロジェクトマネジメントの 3 つのスキルを掲げており、ファシリテーション部門では、これらのスキルをメンバーが高めていけるよう、勉強会の企画・運営を行っている。

また、年度ごとの総会の開催など、特定非営利活動法人としての手続きも行う。この他にも、その時々で組織に必要とされる活動を行い、組織体制の強化に努めている。

4.2.3 普段の活動について

MIS では毎月第 1・3 土曜日の 18:00~21:00 の 3 時間ほど、主に駒場キャンパスで定例会を定期的実施している。定例会にはネットワーク部門など全ての部門が参加し、各部門内の進捗内容を他部門に共有するとともに、代表者のプレゼンからグループでの議論をすることが中心となっている。

定例会の詳細を紹介する。定例会は前もって告知されるアジェンダに従って進められ、アイスブレイクから始まる。アイスブレイクでは伝言ジェスチャーゲームなど毎回様々なゲームが行われ、緊張感を解いて活発な議論をするための準備となっている。次に部門間共有が行われる。JCSIをはじめとする各ネットワーク部門とファシリテーション部門がそれぞれ進捗を発表し、質問を受けたり意見を求めたりする。共有の終了後、残り時間に応じて多様な議論が実施される。ここではこれまでに行われた議論のいくつかを挙げる。MIS 内の問題点を挙げ解決策を提示する課題解決プレゼンでは、リスク管理やマネタイズなどの面で挙げられた解決策が議論の末、実行に移された。MIS メンバーの英語力向上のために行われる英語ディスカッションでは、簡単なトピックについてそれぞれが自由に発言し、スピーキングに慣れることでプロジェクトにおいて活かすことを目指す。JVSI や JBSI が各国の状況を紹介して問題点を挙げ、プロジェクトを提案するプレゼンテーションも行われ、議論を通してより洗練されたプロジェクトの作成を試みる。日本の社会問題について日本語で議論する日本語ディスカッションでは、ブレインストーミングから多方面の問題を発見してグルーピングし、その問題解決に向けて議論を重ねてプロジェクト化することを目指す。その他にも学園祭の出店や新入生の勧誘

についてなど、必要に応じて議論が行われる。ファシリテーション部門は英語・日本語ディスカッションの議題の提供などの運営、まとめの役割を担う。定例会の最後にはフィードバックの時間が設けられ、全員で今回の定例会の良かった点や反省点を挙げて次回の定例会に活かせるようにする。

定例会は多くのメンバーが一堂に会して情報を共有して議論する、MISの活動の根幹となる重要な場であり、更なる発展を続けていく。

5.会計報告

2013 年度 会計報告書

2013 年 4 月 1 日から 2014 年 3 月 31 日まで

特定非営利活動法人 MIS

(単位：円)

科目	金額		
I 経常収益			
1 受取会費			
正会員受取会費	60000		
賛助会員受取会費	0		
2 受取寄附金			
受取寄附金	2771000		
施設等受入評価益	0		
3 受取助成金等	0		
受取補助金	0		
4 事業収益	0		
5 その他収益	0		
受取利息	0		
経常収益計			2831000

Ⅱ 経常費用				
1 事業費				
	(1) 人件費			
	給料手当	0		
	退職給付費用	0		
	福利厚生費	0		
	人件費計		0	
	(2) その他経費			
	会議費	0		
	旅費交通費	2731000		
	施設等評価費用	0		
	減価償却費	0		
	印刷製本費	3000		
	物品その他寄付代	100000		
	その他経費計		2834000	
	事業費計			2834000
2 管理費				
	(1) 人件費			
	役員報酬	0		
	給料手当	0		
	退職給付費用	0		
	福利厚生費	0		

	人件費計	0	
	(2) その他経費		
	消耗品費	0	
	水道光熱費	0	
	通信運搬費	0	
	地代家賃	0	
	旅費交通費	5000	
	印刷製本代	10000	
	減価償却費	0	
	施設利用費	10299	
	その他経費計	25299	
	管理費計		25299
	経常費用計		2859299
	当期経常増減額		-28299
Ⅲ	経常外収益	0	
	経常外収益計	0	
Ⅳ	経常外費用	0	
	経常外費用計	0	
	税引前当期正味財産増減額		0
	法人税、住民税及び事業税		0
	当期正味財産増減額		-28199
	設立時正味財産額		100166

前期繰越正味財産額		0
次期繰越収支差額	次期繰越正味財産額	71867

6.協賛企業・財団紹介

<協賛>(敬称略)

株式会社リーディングマーク

ブルーヴ株式会社

<助成>(敬称略)

公益財団法人 三菱UFJ国際財団

7.役員名簿(2013 年度)

理事長 長谷川太希 東京大学経済学部 3 年

副理事長 谷雄太 東京大学経済学部 4 年

理事 谷暁 東京大学経済学部 4 年

理事 宮川慎司 東京大学教養学部 4 年

理事 倉松忠興 慶応大学総合政策学部 3 年

理事 高野藍 東京大学法学部 3 年

理事 齋藤綾乃 東京外国語大学クメール語学科 3 年

理事 丸山倫太郎 東京大学文科一類2年

理事 小松篤史 東京大学文科一類 2 年

理事 井堀拓郎 東京大学文科三類 2 年

監事 国島秀和 東京大学経済学部 4 年

監事 春日啓秀 東京大学文科一類 2 年

8.ご協力をお願い

私たち MIS は 2012 年 9 月にカンボジアを訪問し、日本語を学んでいる現地の学生と協力して農村の小学校で授業を行うなど、様々なプロジェクトを学生ならではの視点を取り入れ成功させてきました。同時にカンボジアの現状を目の当たりにした上での課題、新たに行うべきことも浮き彫りになり、現在新たなプロジェクトの準備にも取り組んでいます。その中の1つに農村の小学校の図書館建設がありますが、こちらも団体の理念に反しないよう現地の学生との議論、活動により進めていくつもりです。

また今後私たちはカンボジアだけでなく、東南アジア諸国の学生を中心にアプローチをかけていき、ネットワーク拡大を図っていくことも考えています。このように様々なプロジェクトを検討していますが、MIS はほぼ学生のみで活動しており、また 2012 年にできた歴史の浅いサークルでもありますので経験や資金に関しては苦労しているのが実情です。

しかし、プロジェクトが実行できずに現地の子供や学生、また国自体の可能性を潰してしまうことは避けたいと考えています。MIS の活動、考えに少しでも興味、共感を持ってくださり、現地の人々のサポートを少しでも行ってほしいと考えていただける方はどのような些細なことでもかまわないので MIS に連絡を頂けると幸いです。

MIS のホームページや Facebook ページにイイネ！を押していただけるだけでも、活動の支えになりますのでご検討いただけると幸いです。

MIS 一同、微力ではあるかもしれませんが、社会に、そして世界に貢献し今より少しでも良い未来が築ければと心より思っております。何卒よろしくお願いします。

9.連絡先

お問い合わせ先: 公式メールアドレス mis2012leaders@gmail.com

MIS 公式ホームページ: <http://utmis2014.wordpress.com>